

美しくなつかしい、日本をのせて。

# Cradle

【クレードル】出羽庄内地域文化情報誌

11

2012 November/December  
TAKE FREE  
NO.14

特集  
出羽からの  
祈りと再生  
庄内憧憬  
舘野 真知子  
料理家



Cradle 11

美しくなつかしい、日本をのせて。  
【クレードル】出羽庄内地域文化情報誌

2012 November/December  
平成24年11月1日発行(隔月隔数月発行)第2巻8号(通巻14号)

発行/Cradle事務局 山形県鶴岡市山王町8-15 [株式会社 出羽庄内地域デザイン] 電話0235(64) 0888  
制作/Cradle編集部 山形県酒田市赤田2-59-3 [コソウ・コーポレーション] 電話0234(41) 0012

FIDEA GROUP



鳥海山/フナとサナカマド

朝寒の庄内 木々凜と立つ

 庄内銀行



地方で料理をすることの豊かさ  
 ここには東京にはないすべてがあると  
 うらやましく思ったものです。

2011年6月、庄内地方の食  
 を巡る旅に参加し、念願だった庄  
 内に降り立つことができました。

当時は「農業実験レストラン・  
 六本木農園」のシェフとして、ま  
 た、生産者と消費者をつなぐ「農  
 家仲人」として、こだわりの農家  
 や酒蔵、味噌・醤油蔵など、優れ  
 た作り手を探して日本全国を巡る  
 日々でした。その中でも、庄内地  
 域はぜひ一度訪れてみたかった土  
 地。その大きな理由には「アル・  
 ケッチャーノ」のシェフ、奥田政  
 行さんの存在がありました。

以前から山形県の尾花沢市、山  
 形市、天童市などたくさん農家  
 の方々とお付き合いを通して、  
 良質な生産物があること、食の宝  
 庫であることは知っていました。  
 ただ、首都圏と違って人口も少な  
 く便利とはいえない環境で、奥田  
 さんはどのようにして全国、海外  
 から注目されるレストランをつく  
 ることができたのか。そのことを  
 同じ料理に携わる者として知った

かったのが実のところでした。

奥田さんのアテンドで2日間、  
 生産者を巡り、庄内の自然をひし  
 ひしと感じながら、おいしいもの  
 をいただき、食の知恵を教わる  
 という贅沢な時間を過ごしました。  
 特に印象的だったのが、山の恵  
 みを肌で感じられたこと。山に入っ  
 て林道をしばらく歩くと、厳かな  
 霧囲気の中に湧き出す胴腹滝。  
 こっちは軟水、こっちは中硬水と、  
 同じ場所でありながら2種類の水  
 が流れる不思議な水場でした。

「料理に使う水を汲みに来ます」  
 というこだわりを聞いて、地方で  
 料理をすることの豊かさ、東京で  
 はとても表現できないすべてがあ  
 るのだと、感服を通り越してうら  
 やましく思ったものです。

また、鮭のふ化場近くを流れる  
 牛渡川のこと。うっすらと霧が  
 かかる水面をそっとのぞいてみる  
 と、流れの中にかわいい白い花を  
 つけた梅花藻が揺れていました。  
 その姿があまりにも美しく、この

豊かさがあるからこそ、奥田さん  
 は庄内にこだわられたのだろうと  
 いう思いを確かにしました。

そして、日も沈みかけたころ。  
 バスで丘を通り過ぎた時に目にし  
 た光景が、私の記憶を呼び起こし  
 ました。羊がのんびりと草を食み  
 ながら放牧されている景色、それ  
 はまるで留学していたアイラン  
 ドの姿そのものだったのです。

「庄内は日本のヨーロッパのよう  
 なところかもしれない」

豊かな自然のもと、生産者と尊  
 敬しあう関係性、生まれ育った地  
 域を料理で活性化させること。料  
 理人としてできることを惜しみな  
 く捧げる奥田さんと一緒に、  
 たくさんのヒントをもらいました。  
 今度はまた別の季節に、庄内を  
 訪れたいと思います。その時は私  
 も今より成長して、さらなる魅力  
 に気づき、出会えるだろうと、思  
 いを馳せて。



左はCradle旅行倶楽部主催ツアーで  
 庄内を訪れた時の様子。

たてのまち／料理家、管理栄養士。栃木県真岡  
 市生まれ。管理栄養士の実務経験を経て、アイルラ  
 ンドの料理学校「Ballynallye Cookery School」に  
 留学。西洋料理、ワイン、オーガニックハーブ、スパイ  
 スについて学ぶ。東京「六本木農園」の初代グラウン  
 ドを務め、生産者と消費者との橋渡しをライフワー  
 クとする。著書に「塩麹と発酵食のレシピ」(アスク  
 ト刊)がある。



# 特集 出羽からの 祈りと再生

「東日本大震災を経た今、自然崇拜、山岳信仰など  
東北独自の文化を見つめなおすことから、東北、日本の再生を考える」  
平成24年9月22〜24日、このコンセプトをもとにしたイベントが、  
羽黒山を中心に庄内一円で開催されました。それから1ヵ月あまり、  
今回クレードルでは、当日参加した講師の方々のご協力のもと、  
庄内から東北、日本へ、メッセージをお届けします。

※当日の詳細については、HP「庄内文化遺産探訪」をご覧ください。

羽黒山五重塔前で披露された  
森繁哉さんと岡野弘幹さんによる  
「創作番楽と月山交響曲」。



9月22〜24日にかけて開催された「われこれいま、東北の魂と」。初日には、日本を代表する宗教学者、山折哲雄さんの基調講演と、山折さんを含む5名のパネリストたちによるパネルディスカッションが、いでは文化記念館で開催されました。本誌はその後、山折さんからクレードルに寄せていただいた、特別寄稿です。



### 山折哲雄さん

Yamaori Tetsuo  
宗教学者、  
国際日本文化研究センター  
名誉教授(元所長)

昭和6(1931)年、サンフランシスコ生まれ。東北大学助教授などを経て、昭和57年国立歴史民俗博物館教授。63年国際日本文化研究センター教授、平成13年同所長。日本人の宗教意識や精神構造を研究。22年南方熊楠賞。著作に「日本宗教文化の構造と祖型」「日本人の靈魂観」など。

以前、日本列島を3千メートル上空から撮影した映像をみたことがある。沖縄から本土までは一面の大海原だった。ところがセスナ機が本土を横断しはじめると、景観が一変した。北海道の北限まで、眼下に展開するのは山また山、森また森の連続だったからだ。

その一時間近くのビデオを見ていて、私は、それまでの常識的な日本列島観を改めざるを得なかった。そこに、稲作農耕社会の片鱗だにみとめることができなかつたからだ。海洋国家、というならわかる。森林国家というのなら納得できる、と思ったからだ。やがて私はそのビデオ映像が「高さ」のトリックから作られているということに気づいた。仮にセスナ機を1千メートル上空まで下降させてみるとしよう。そうすれば眼下に關東平野などの稲作農耕社会がその姿をあらわすに違いない。さらに500メートル、300メ

ートルに下げていくと、今度は近代的な都市や工場群がみえてくるだろう。

そのとき私は、われわれの日本列島が三層構造で出来あがっている

## 出羽三山の 修験文化から 考える、 祈りと再生。

ることに気づいたのである。まず、縄文的ともいべき森林・山岳社会、ついで弥生的といつてもいい農業革命以後の稲作社会、そして産業革命を経たあとの都市社会、の三層である。そしてこのことは

るのではないかと思つたのである。列島形成の三層構造が、日本人の意識の三層構造をつくりあげているといつていいのではないだろうか。そしてこの意識の三層構造が、ひとたびこの国に危機が

震と台風による災害を日常的に経験してきた日本列島人に、希望のようなもの、可能性のようなものが本来をなわっているのではないかと思つたのだ。そのことを痛烈に思い知らされたのが、あの3・11の大災害だったのではないだろうか。

災害地における人々の運命はたしかに過酷である。住みなれた土地から離れなければならない人々が大量に発生しているからである。移動、移転を余儀なくされる人々の流れが止むことはないだろう。そのため被災地の復興という事業が困難をきわめるであろうことも予想される。

しかし、さきにふれた三層構造にもとづく日本列島形成の歴史をふり返るとき、わが国の先人たちが移動(狩猟・採集)と定着(農耕)をくり返して今日の集住形態(都市生活)をつくりあげてきたことにあらためて気づく。その移動と定着をくり返してきた日本列島人のライフスタイルを、いわば

東北の再興には、移動し、定住する人間たちの力が求められている。その姿を太古から残すのが、山岳修験の山伏のあり方なのであろう。



9月22日のシンポジウム「東北の文化から考える祈りと再生」の様子。コーディネーター(株)わらび座相談役の是永幹夫氏。パネリスト(株)山折哲雄氏、佐高信氏(評論家)、椎川忍氏(総務省自治財政局長)、千歳栄氏(東北芸術工科大学東北文化研究センター運営委員長)

たのに違いない。

そのように考えたとき、私は地

鏡に映し出すような形で今日に残しているものの一つが、山岳修験の宗教文化であり、そのライフスタイルの伝統だったのでないだろうか。「山伏」の生活に見られる「移動し定着する人間」たちの



写真提供=鶴岡市羽黒町観光協会

文化であり、そこから生み出された宗教芸術だったのだと思う。出羽三山信仰の伝統を、そうした観点からあらためて見直してみるときが、今きていると思うのである。

出羽からの  
祈りと再生  
Special Edition



開催2日目となる9月23日には、いでは文化記念館と酒田市  
公益研修センターを会場に3つのテーマでパネルディスカッションが  
開催されました。神田より子さんは、その中のひとつ「出羽三山を  
中心とした文化財と精神文化」に参加されたパネリストのお一人です。  
庄内地方の修験道について、クレードルに寄せていただきました。



## 神田より子さん

Kanda Yoriko

敬和学園大学教授、  
民俗学者

昭和22(1947)年、埼玉県生まれ。慶應義塾大学文学部卒業。慶應義塾大学社会学部研究科博士課程修了。敬和学園大学人文学部教授。日本各地の祭りや生活、宗教などの調査を通して、その地の文化や人々の生き方を理解する民俗学が専門。出羽三山の山伏体験なども自ら行う。

### 修験道の目指すもの

羽黒山や鳥海山のような山岳は、  
私たちが常に水や豊穡を求める地  
として、また死者の霊が赴く他界  
として、認識されてきた。そうし  
た山岳に分け入り、春夏秋冬の季  
節ごとの峰入りや籠りの修行をす  
ることで、特別な力を獲得し、そ  
の力によって里人を救済しようと  
試みてきたのが修験者である。

山岳は山の神の住む霊地であり、  
そこに籠って修行をすることで山  
の神の力を体得するとされた。

また山岳は「他界」ともされ、  
他界遍歴をした多くの修行者の伝

説や神話が残っている。

### 羽黒修験の修行

#### (1) 秋の峰

羽黒山では現在も8月24日から  
9月1日まで「秋の峰」が行われ  
ている。これは「十界修行」と称  
し、峰中で地獄、餓鬼、畜生、修  
羅、人、天、声聞、縁覚、菩薩、  
仏の十界にあたる修行を行うこと  
で仏性を得、生身のまま成仏でき  
るといふ考えで、「即身成仏」と  
いう。これは儀礼的に一度死んで、  
山中での修行を経て、新たな魂や  
力を身につけて生まれ変わるとさ  
れる擬死再生の修行である。

# 修験道の 儀礼と芸能

## 羽黒山と鳥海山

### 鳥海山修験と 羽黒山のかかわり

鳥海山には、山形県遊佐町の蕨  
岡と吹浦、秋田県にかほ市象潟町  
小滝と由利本荘市瀧澤と矢島に修  
験集落があった。

山岳に分け行つて、修行をすることで  
特別な力を獲得し、その力で里人を  
救済しようと試みてきたのが、修験者である。

#### (2) 冬の峰

また9月30日から12月31日まで、  
100日間にわたる籠りの修行が  
ある。「松聖」と呼ばれる二人の  
修行者は、それぞれ「位上」と「先  
途」と称し、9月30日から齋戒沐  
浴して冬籠りの修行をする。そし  
て12月31日の満願の日の松例祭に  
おいて、二人の松聖が修行によつ  
て獲得した験力を競う験競べが行  
なわれている。



写真提供=鶴岡市羽黒町観光協会



### 国指定重要文化財 羽黒山三神合祭殿 Hagurosan Sanjingosaiden

文政3(1820)年に再建された社  
殿で、明治以降は月山、羽黒山、湯  
殿山の三神を祀る。茅葺木造建  
築物としては日本最大。他にも羽  
黒山頂には国指定重要文化財の  
鐘楼と大鐘、鏡池、歴史博物館(木  
曜・冬季休館)、齋館などがある。  
〒鶴岡市羽黒町手向 羽黒山頂  
☎0235-62-2355(出羽三山  
神社)



### 鳥海山大物忌神社 Chokaizan Omonoimijinja

鳥海山頂に本殿、麓の遊佐町吹  
浦と蕨岡に「口ノ宮」と呼ばれる里  
宮が2ヶ所鎮座する。平成20年に  
本社から口ノ宮にいたる広範な境  
内が国の史跡に指定された。

#### ◆吹浦口の宮

〒遊佐町吹浦字布倉1

☎0234-77-2301

#### ◆蕨岡口の宮

〒遊佐町上蕨岡字松ヶ岡51

☎吹浦口の宮まで

### 出羽からの 祈りと再生 Special Edition

資料が残っている。  
江戸時代中期まで、羽黒修験と  
蕨岡及び吹浦の修験は緩やかな結  
びつきがあった。蕨岡と吹浦には  
そうした関係を示す文書が残って  
いる。秋田県側の瀧澤は江戸時代  
末まで羽黒派修験だったし、今も  
交流がある。矢島は不明だが、羽  
黒との歴史的なかわりは深い。



写真提供=鶴岡市羽黒町観光協会



9月23日のパネルディスカッション「出羽三山  
を中心とした文化財と精神文化」コーディネ  
ーター出羽商工会観光研究会会長の星野文  
紘氏、パネリスト神田より子氏、岩鼻通明氏  
(文化地理学者)、春山進氏(元山形県博物館  
長)。いでは文化記念館にて。

彼らが鳥海山修験としてまと  
まつて活動することはなかったが、  
山形県側に限って言えば、庄内藩  
が彼らを鳥海修験と認識している



23日は引き続き、いでは文化記念館にて「旧庄内藩校致道館と徂徠学」というテーマのもと、パネルディスカッションが開催されました。地元パネリスト陣が致道館教育について述べる中で、異彩を放っていたのが、当日の発言の要旨を、改めて寄稿していただきました。



松村 宏さん  
Matsumura Hiroshi  
慶應義塾大学名誉教授

昭和18(1943)年、東京都生まれ。慶應義塾普通部中学校入学以来、今日まで同塾に在籍。専門は徂徠学を軸とする日中独仏英の文明学説史。旧庄内藩校「致道館」で展開された徂徠学についても30年あまり研究を続け、膨大な資料を集約した「徂徠先生論語微解」を執筆中。

東北公益文科大学新学長の最初の標語は「庄内から世界をみよう」で、霞ヶ関基準から世界基準への提言であった。そのためにも次の予期される標語は「世界から庄内をみる目」を養うことであろう。地域共同体と自身との外の天上に、自分の目を飛ばすことを含む価値外在説は、日欧に限られた封建思想の熟成と、その近代市民化との中でのみ成立した。人物と事物の認識と評価は、そうする人の眼力に責任がある。勝手な心眼の地平を越えて、世界を測定する客観的外在的観点を構築し、明示できこそ、初めて世界認識に進める。

近現代世界過程を主導する原理と指針、また主導する勢力と方策に巻き込まれている内向きの国家、地域と人間が、逆にそれらを見抜いて世界を誘導する新しい道は、実に徂徠学とその唯一の発展たる「致道館学」によって用意された。すばらしいことに、古典の致道館読と素読が今日まで保持されているので、この初歩段階を基盤として、高次の眼識を再興し、発展させる時が来ている。致道館の特色は、少年期からの自学自習と会業による個性発揮の方法にある。しかしこれを賞揚してきた内外の識者の多くが、自学

自習も会業もせずに反個性主義の旧見に立っている。産業界勝組の偉人の真似を学生に求めたり、また自学自習と会業を高く評価したつもりで大学院段階に適合とするなど、口先ばかりでまったくわかっていないのは無理もない。日本武士道独自の致道館学は、中国古代周と中近世日欧の封建制における独立入参謀官僚の個性的学識のめざらしい集約であった。これは、秦漢より今日までの帝国制従属人官僚制向きに改造された伝統儒学を、初めて歴史的に精算した復古学であると同時に、ひと皮むけば近代市民社会人の主力にとっての

# 徂徠学とその唯一の発展たる致道館学が世界を誘導する。

写真提供—致道館文化振興会議



致道館の敷地内にある聖廟と、所蔵されている孔子像(複製)。また館内には実際に使われていた「致道館本」と版木を展示。毎年夏には子どもたちの論語素読体験教室が開催されています。

写真提供—鶴岡市教育委員会社会教育課



(発明と発見) する際のように指す。けつして確定しているわかりきった採点できる知識とわざを取りに往くことのできるような授受ではない。むしろ、知らない価値あるものを、それが向こうから来てくれるだけのことをして、その時に外さぬように待ち受けるのが、上中下の庄内勢の総員各自が体現した上級武士道にして、君子の道であった。

士官国家文明のままで、将官と参謀に組織的にも人間的にも実力と実権が欠如していると診断されている。明治8年に庄内同盟軍が出京するだけで政権を握るに至るところで、不発に終わらなければ、世界有数の高級指導文明に達したことを考えれば、いま一度、世界を見ぬいた庄内勢の出陣が願わしい。その起点こそ、致道館学の再興による幼少青壮老の鍛錬に他ならない。

日本近代は、敗戦前も後も、下

## 出羽からの祈りと再生 Special Edition

すばらしいことに、庄内では古典の致道館読と素読が今日まで保持されているので、高次の眼識を再興し、発展させる時が来ている。



国指定史跡  
庄内藩校 致道館  
Shonaihanko Chidoikan  
文化2(1805)年に庄内藩主酒井忠徳公が創設。徂徠学を教学とした教育方針は、鶴岡の教育文化の風土を育む土壌となった。現存する藩校建築としては東北地方唯一。  
〒鶴岡市馬場町11-45  
☎0235-23-4672  
☎月曜日、12/29~1/3  
☎9:00~16:30 入館無料



23日に酒田市公益研修センターで行われたシンポジウムでは、パネリスト3名を迎え、「北前船交易による酒田の湊町文化」とのテーマでパネルディスカッションが行われました。今回、クレードルに原稿を寄せてくださったのは、その時のパネリストである酒田市出身の佐高信さん。故郷への力強いメッセージが届けられました。



佐高信さん  
Sataka Makoto

評論家  
昭和20(1945)年、山形県酒田市生まれ。高校教師、経済雑誌の編集者を経て評論家に。「社畜」という言葉で日本の企業社会の病理を露わにし、会社・経営者批評でひとつの分野を築いた。経済評論にとどまらず、憲法、教育など現代日本について辛口の評論活動を続ける。

# 時流に逆らっても進むのが、「裏日本」の反骨精神である。

「裏日本の反骨」と題して、斎藤茂吉や中野重治、そして土門拳のことを書いたことがある。いずれも日本海に面した雪国出身という共通点があるが、彼らの歌、小説、そして写真には、不屈の精神がみなぎっている。その3人に藤沢周平を加えてもいい。「裏日本」などと言うけれども、かつてはこうした「表日本」だったんだぞという反発と、表と裏という浅薄な区分けそのものを吹き飛ばす骨太のたくましさ、彼らの作品にはある。3人の反骨精神を洗練したのは、北前船に乗って流れてきた文化だろう。それが彼らの不屈さに

味付けをした。いま、酒田には「西の堺、東の酒田」と謳われた華やかさはない。当時の堺と酒田を支えたのは、商人の自治意識だった。自前の精神である。現在の酒田には、残念ながら、それが欠けている。港町の特徴は、すべてに開かれていることなのに、対岸の韓国や北朝鮮、そして中国との関係は明るくない。それを暗くした元凶のひとりには、「表日本」出身の都知事、石原慎太郎だろう。彼が「都民」という言葉を使うことはほとんどない。いつも「国民」である。都を放つ

ていらしい。しかし、それでいいのか。港を基点にした交流は国をも超えるのである。たとえば鳥取県の境港市は、北朝鮮の元山市と姉妹都市になっており、国交がないままに交流していた。「表」の論理で、中国や韓国、北朝鮮との関係を悪くしては、「裏」の酒田の特色を発揮することはできない。かつては、こちらが表だったというの、これらの国との交流があったためである。酒田出身の池田正之輔という代議士がいた。自民党の中でも反共産主義の指折りのタカ派だったが、その池田でさ



## 出羽からの 祈りと再生 Special Edition

「西の堺、東の酒田」を支えたのは、商人の自治意識と自前の精神である。流れに乗るのではなく、流れをつくるのが、港町酒田の文化なのである。

ことではない。いま、『友好の井戸を掘った人たち』という本を書いているが、佐藤栄作政権の末期に、自民党の幹事長だった保利茂は革新都知事的美濃部亮吉を通じて、中国の首相の周恩来に手紙を送った。いわゆる「保利書簡」である。これが田中角栄による日中国交正常化の道を開くことになったが、「ストップ・ザ・サトウ（佐藤栄作）」を唱えて都知事になった美濃部が、あえて保利の手紙のメッセージになったことに比べ、その美濃部に都知事選で敗れた石原のなんと倭小なことか。田中を含めた裏日本出身者の苦労を石原はまったくわかっていない。斎藤茂吉の歌「最上川逆白波の立つまでに吹雪く夕べとなりけるかも」は、時流に逆らっても進む雪国育ちの気骨を表している。流れに乗るのではなく、流れをつくるのが港町酒田の文化である。



国指定史跡  
旧鑑屋  
Kyu Abumiya

江戸時代を通じて廻船問屋として栄えた鑑屋。現在はその歴史を伝える史跡として一般公開されている。同じ通りには日本一の大地主と称された本間家旧本邸もある。  
☎酒田市中町1-14-20  
☎0234-22-5001  
☎12~2月の月曜、12/29~1/3(3~11月は無休)  
☎9:00~16:30  
☎一般310円ほか

(写真右)井原西鶴の「日本永代蔵」に紹介されるほど繁栄していた「鑑屋」。現在は当時の様子が再現、保存されています。(左)酒田の飯森山公園内にある土門拳記念館は、日本最初の写真専門美術館。



9月23日のパネルディスカッションⅢ「北前船交易による酒田の湊町文化」。コーディネーター 高橋英彦氏(東北公益文科大学名誉教授、パネリスト)佐高信氏、土岐田正勝氏(東北公益文科大学非常勤講師)、小山恵子氏(NPO法人酒田港女みなと会議理事長)。酒田市公益研修センターにて。

え、共産主義の中国と交流せよ、と訴えていた。まさに、不穏な空気が漂っている今こそ、民間の交流を通じて、強ばった空気を溶かすべきなのである。中国けしからんなどと、慎太郎の尻尾に乗って騒ぐのは、港町酒田の人間のする



9月23日のシンポジウム終了後、国宝羽黒山五重塔を舞台に、「創作番楽と月山交響曲」が披露されました。雨が静かに降りそそぐなか、踊りと音による新しい「祈り」を表現したのは、舞踏家の森繁哉さんと音楽家の岡野弘幹さん。何度も月山を訪れ、修行体験も経験しているという岡野さんから、出羽三山への思いを寄せていただきました。

僕は月山が好きだ。好きでしようがない。1999年、大切な友人が僕をこの地に結んでくれた。それ以来、気がつけば毎年のようにこの場所に帰ってくる。なぜそんなにもこの場所に帰りたい衝動にかられるのだろう。

平成17年8月、湯殿山開山1400年にて奉納演奏を行った後、神社の神主様と共に御滝へ行き、

# 山から生まれ 山で生き、山に帰る。 人は山に 抱かれて生きる。

海外体験や、さまざまな旅を経て、頭では何かそれなりに分かった気がした。しかし、滝行の後のありがたみといったらすごい。恐ろしさや安堵感が共にある感覚。生きている実感。感謝、そして感謝。皆さんはご存知だろうか。毎年、

「今回、東北を代表する舞踏家・森繁哉先生と、国宝羽黒山五重塔で「コラボレーションライブ」を行った。風雪に耐えた重厚な五重塔。そこから森繁哉扮する松聖が現れる。現代から過去へ、そして今またこの瞬間に帰ってくるような感覚を覚えながら演奏した（岡野弘幹）」



（写真上）毎年8月13日に月山山頂で行われる「柴燈祭」。護摩壇に灯された火をめぐり、ご先祖様が帰ってくることを祈っています。（写真右）今回のイベントでは、「東北の伝統芸能に秘められた鎮魂と癒し」のテーマのもと、羽黒山頂の峰子社と酒田公益研修センターを舞台に庄内の伝統芸能が4つ披露されました。写真上から「高寺八講」、「黒川能」、「蔵岡延年」、「黒森歌舞伎」。当日、観客の皆さんは、それぞれの演目を食い入るように鑑賞していました。

実感があつた。

出羽三山に残る山伏の文化。山から生まれ、山に生き、山に帰る。その感覚は、人は山に抱かれて生きていくことを教えてくれる。そして私たちに、生きている実感を与えてくれる。金剛、胎蔵の世界。まるで目に見えるものと、目に見えぬ魂のハブ空港のようだ。縄文よりこの山は私たちに大切なものを伝え続けてくれている。今こそこの空間を乗り切るためにも、その声に耳を傾けようではないか。



写真提供一鶴岡市羽黒町観光協会

## 出羽からの 祈りと再生 Special Edition

出羽三山は、金剛、胎蔵の世界。まるで目に見えるものと、目に見えぬ魂のハブ空港のようだ。縄文以来、大切なものを伝え続けている。



### 岡野弘幹さん Okano Hiroki 作曲家、 音楽プロデューサー

昭和39（1964）年生まれ。平成2年、ドイツのレーベルからアルバムを全世界発売。世界の民族楽器、自然音を融合した独自のアンビエント・サウンドは世界各地で高い評価を得ている。「地球共鳴」をテーマに世界の聖地や自然遺産、全国の著名社寺などで奉納演奏を行う。





## 庄内論語の カレンダー

「庄内論語」が綴られたカレンダーは  
毎月はもちろん、ずっと使える1日1題の  
日めくりタイプ。添えられた解説を読めば  
その意味の深さに、納得、感服。

「子いわく」の出だしで始まる行といえ、高校時代に習った漢文「論語」を思い出す人が多いのではなかろうか。「庄内論語」とは、旧庄内藩校「致道館」が行っていた学問のこと。カレンダーのことは致道館で使っていた教科書「論語」からの抜粋だ。1日から31日まで綴られているため、一年といわず何年もくり返し使える。

そもそも「論語」とは中国古代の思想家・孔子の教えを忘れないようにと、弟子たちがまとめた記録集だ。これを基に生まれた儒教はその後さまざまに発展するが、徳川幕府はそのひとつである「朱子学」を官学に決めて、全国諸藩に奨めた。だが庄内藩は、同じ論語をベースにしながらも別流派の「徂徠学」を取り入れ、独自に致道館教育を發展させた。二つの学問の違いについては割愛するが、鶴岡に伝わる庄内論語が、「子のたまわく」など、よく知られた論語とところどころ違う読み方や解釈があるのは、そのためだ。

この致道館教育だが、藩校時代の教育がそのままの形で残るのはめずらしい。ましてやそれが全国的に知られる論語と違うとなれば、その価値はかなりレアだ。地域ではこの文化遺産を次世代に伝えようとさまざまな取り組みを行ってきた。そのひとつが致道館文化振興会議発行のカレンダーである。平成8年に発行されたカレンダーの第2弾として、前回とは異なることばが31人の筆で書かれている。リビングの壁に掛け、毎朝めくる度に音読すれば、一日が凜としたものになるだろう。2500年前から伝えられてきた聖人のことばは、きつと今日を生きる指針となるはず。



致道館文化振興会議では、庄内論語の素読会や論語書道展、市民向け講演会の開催のほか、学校単位で素読体験や致道館学習を受け入れる教育普及活動も行っている。また今年7月には鶴岡市教育委員会が『親子で楽しむ庄内論語』を発刊し、市内の小学5・6年生と中学3年生に配布。学校での活用が開始した。

販売先／致道博物館、Cradle Shop  
お問い合わせ／Cradle Shop ☎0800-800-0806





特別企画 庄内俳句紀行

# 雪催ふ 庄内を歩く

黄金色の田の稲刈りが終わる頃、明け方、白鳥の声で目が覚めた。北からの第一陣が今年もやってきたのだ。稲刈りの終わった田が、まるで春先のように「瞬若草色の絨毯を拡げる。稽田である。落ち穂拾いをする白鳥たちがあちらこちらで目につくようになると、庄内はまもなく色のない季節へ移ろいでゆく。

渡り来て落ち穂を拾ふ白き群 — 敦子

みちのくの雪をあつむる最上川 — 敦子

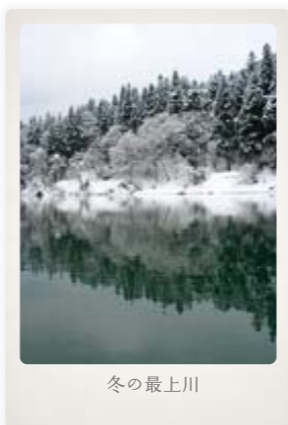
庄内の冬は暗く寂しいと、以前は思っていた。しかしこの薄墨色の景こそが一枚の絵となり句となるのである。冬の最上川は、天然杉と雪と水面が織りなす、まさに幽玄な水墨画の世界となる。

五月雨や集めて早し最上川 — 芭蕉

芭蕉が訪れたのは元禄二年六月（陽暦七月）であった。縷々と流れる最上川は、緑豊かに両岸を率いたであろう。一方で、雪に煙る山々と川の水面が描き出す一幅の絵を眺めて炬燵に入り、鍋を囲んでの舟下りは、また違った趣がある。

乾鮭や眼にとどめる鳥海山 — 敦子

最上川より少し北に、鮭が遡上する月光川がある。鮭は煌めく美しい水面に、傷ついた背びれと尾びれを見せながらのぼってくる。そして日本海に下ることもせず、ここに息絶えてしまう。ふと見上げると、今年も初冠雪を迎えた鳥海山が、常と変わらぬ勇姿で鮭を見守っていた。月光川水系にある鮭のふ化場で、鮭の寒風干しを見ることが出来る。乾鮭の眼に映る鳥海山を見るたび私は、生まれ故郷に帰ってきたという鮭の満足感、その帰趨本能を感じずにはいられない。



冬の最上川

冬、日本海に面した湯野浜温泉に泊まると荒海の叫びの夜を迎える。「鮭起し」ともいわれる雷が響き、岩場の海岸には「波の花」が舞う日もある。この厳しい

雪に翻弄される暮らし。雪掻きに二の腕が悲鳴を上げる日や、地吹雪に一步も前に進めない焦燥感。しかしそれらの中に「忍耐」や「努力」が与えられているような気さえしている。

風気こそが冬の庄内の味、寒鱈や岩のりを益々美味しいものにしてくれる。この季節の味には、とりわけ米どころ庄内の日本酒がよく合う。

冬の激しい風が、柵や垣などに吹き付けて笛のような音を出す。その音を「虎落笛」という。この「虎落笛」を聞き、あるいは「地吹雪」を体験しに庄内を訪れる人も少なくないという。



鮭の寒風干し(乾鮭)



升田の玉簾の滝

庄内の厳しい冬のなかにも、ことほか穏やかな日がある。一面の雪景色に一面の青空。それはもう美しい青で、この地にひとときの安寧を与えてくれる。その空に舞う白鳥たちの姿は、冬の冷たさに尖った心をやわらげるかのようだ。酒田市升田にある玉簾の滝は、落差六十メートルの県下一の滝で知られているが、二月には凍滝となり、その権現たるや見事と言うほかない。

寒さゆえ地元では見過ごされがちな自然の営みも、モノクロームの景色も、すべては厳しさのうちに心得ている。人は、人だけで生きてゆくことができないが、庄内にいると、日本海や最上川、そればかりでなく土や水に至るまで、この風土に寄り添うように生きることが出来るだろう。

滝凍てて円空佛のごとく立つ — 敦子

写真・文 俵谷敦子(月刊俳誌「月の匣」同人)

## Cradle 旅行倶楽部 冬のおすすめ旅



### 少人数 グループプラン モデルコース

#### 1日目

東京 → 新庄 → 戸沢村(舟下り) 清川(芭蕉句碑) → 升田の川 玉簾の滝 → ホテル R&G (泊)



#### 2日目

最上川河口 白鳥 → 山居倉庫 本間美術館別邸 鶴舞園 → 大松屋(お蕎麦) → 月光川 箕輪 鮭ふ化場 → 湯野浜温泉 (泊)

#### 3日目

善寶寺 → 大山公園と白鳥 致道館 → 昼食 → 藤沢周平記念館

ご都合の良い日程に合わせてプランニングします。

このほかのプランも含めお気軽にお問い合わせ下さい。

お問い合わせは

フリーアクセス **0800-800-0806**

庄内 クレードル

株式会社 出羽庄内地域デザイン